

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第七十九回）

「大伴旅人を慕う歌」

①九州の総督・外交・辺境防備の任を担って設置された地方として最大級の役所であった「大宰府」の長官（大宰帥）であった大伴旅人が大納言に昇任し、帰京（奈良・平城京）したのは、天平二（730）年冬十二月のことであった。

②帰京後の大伴旅人に対して筑紫で六六一年に崩御された第三十七代斉明天皇の菩提を弔うために、造営していた筑紫観世音寺の別当（造営の長官）として大宰府にいた沙弥満誓が贈った歌と、それに答えた大納言・大伴旅人の返歌が万葉集に収められている。

【大宰帥大伴郷（旅人）の京に上りし後に、沙弥萬誓、郷に贈る

歌二首】

みあ

おく

1) まそ鏡 見飽かぬ君に 後れてや

あしたゆふへ

を

朝夕に さびつつ居らむ

(解説)

・いくらお逢いしても飽きないあなたに置きざりにされて、いつまで朝に夕に変わりなく寂しい気持ちをだきつづけるでしょうか。

2) ぬばたまの 黒髪変り 白けても 痛

いた

き恋には 逢ふ時ありけり

巻四―573

(解説)

・黒髪がまっ白になる年になっても、こんなに激しい恋心に苛まれることあるのです。

①新潮日本古典集成「万葉集」によるとこの歌は前歌とともに、恋歌めかして相手(大伴旅人)のいない寂しさを訴えた歌であるという。

②「白けても」色が白く変わる意で白髪の老人になったことをいう。

③沙弥満誓さみまんぜいは大宰府にいたときに大伴旅人、山上憶良、小野 老などの人々と「万葉集」に収められた数々の歌を残しました。それを後の人が称して「筑紫歌壇」と言いました。

(写生地)・前二首の作者沙弥満誓さみまんぜいが齐明天皇の菩提を弔うため別当べつどう(造

営の長官)として造営された大宰府観世音寺は福岡県大宰府市観世音寺

町にあり楠の巨木に囲まれ静寂の中にたたずんでいる本堂一帯の風景を

描く。(杏花)



【大納言大伴郷が和ふる歌二首】
こた

1) ここにありて 筑紫やいづち 白雲の

たなびく山の かた方にしあるらし

巻四―574

(解説) ここから見て筑紫はどの方向になるだろう。白雲のたなびくあの山の遙か彼方であるらしい。

① 「ここ」とは大伴旅人の大和の邸宅をさす。大伴邸は奈良・平城京跡近くの東側に位置する佐保山と呼ばれる丘陵の麓にあったといわ

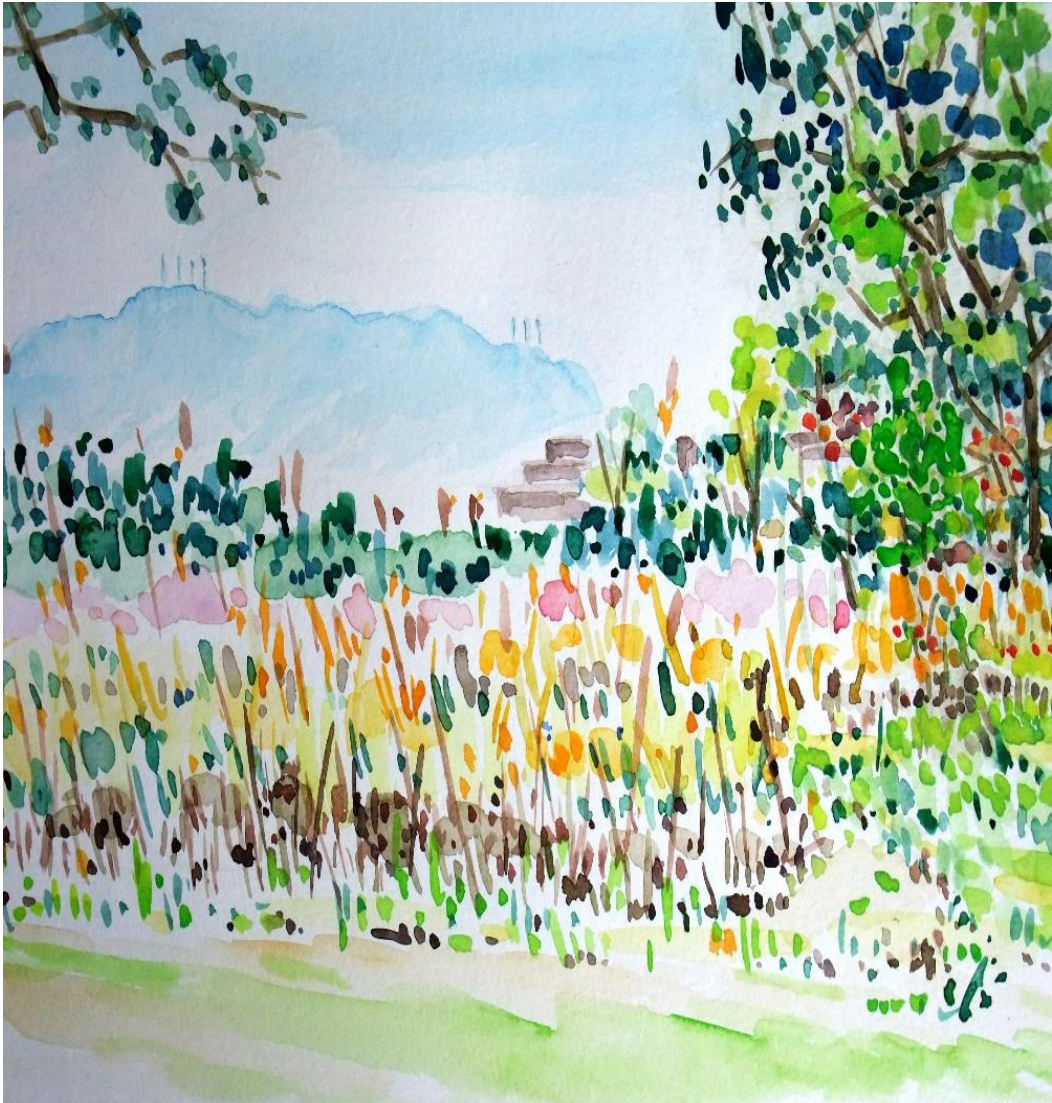
れている。

② 「白雲のたなびく山」とは平城京跡から西方・筑紫方向に聳える

生駒連峰^{らごせ}あたりを眺めていったものであろう。

(写生地) 奈良・平城京跡地から西方、奈良県と大阪府の県境にそびえる

生駒連峰を描く。(杏花)



くさかえ

2) 草香江の 入江にあさる 葦鶴の

あしたづ

あなたづたづし 友なしにして

(解説) 草香江の入江で餌をあさる葦鶴あしたずの名のように、ああ、たづたづしい(心細い)ことだよ。ともに語りあえる友もいなくて。

①草香江は古くは生駒山の西麓(東大阪市)にあった浅い湖をいう。おおほり

②なお、もう一つの説は博多古図には博多湾西部、福岡市の大濠公園辺りまでを「草香江」として入江が描かれており、さらに今も大濠公園の南に草香江という地名がある。このことから「相手に近いその海岸のイメージを重ねて友を思う心を強調している。」の説がある。

(参考文献) 新潮日本古典集成、樋口和也著「万葉集地名総覧」等

(写生地) 福岡市の中心部にあり市民の憩いの場となっている「大濠公

園」一帯を描く。(杏花)

